AROUND THE WORLD 8

アフリカの手話の世界探訪[1]

ろう者の教会・ナイジェリア

亀井伸孝　Kamei Nobutaka　（関西学院大学）

国名「ナイジェリア」の手話表現

「みなさん，ともに祈りましょう。日本から来た私たちの友人，ドクター・カメイのために。彼の無事の帰国と，アフリカ諸国での研究の進展のために」

ナイジェリア最大の都市，ラゴスの教会。150人ものクリスチャンがいっせいに立ち上がり，日本から来た珍客である私のためにお祈りをしてくれた。ただし，この教会では声を使わない。ろう者の教会だからである。

ろう者とは，手話を話す耳の聞こえない人たちのことだ。言語学的研究の中で，手話が身ぶりでなく文法をそなえた言語であること，ろう者の間で世代間伝承されている自然言語であることなどが明らかになった。世界には少なくとも119種類の異なる手話言語が分布し，ろう者が地域により異なる文化をもつこともわかってきた。

私は1990年代の中頃から，西アフリカ諸国のろう者に関する文化人類学的調査をしている。このろう者の教会も，その中で訪れた場所の一つである。「ろう者のフィールドワークってどういうふうにするんですか？」とよく聞かれるが，ある地域のろう者たちが話している手話を学び，日常的なつきあいの中でろう者たちの慣習や価値観，歴史観などを学ぶのである。ふつうの文化人類学の調査とも似ているが，生活もインタビューも打ちあわせもすべて手話で行うという点が特色だろう。

さて，冒頭のろう者の教会。長い賛美歌がまだ続いている。これまでずいぶん多くの教会を訪れたが，ここのろう者の聖歌隊の歌は手話のリズムが完璧にそろっており，西アフリカ随一の美しさではないかと思う。近隣の都市イバダンのろう者の教会は，大だいこを使っていた。「どん，どん，どーん」という空気の振動はろう者たちの身体に響き，それが賛美歌のリズムの基調をなしている。聞こえる人が一人もいない空間で，手話でくり広げられている視覚文化の世界があり，しかもそれらは多様性にみちている。私は各地のろう者の教会を訪れ，「目で見る音楽」をビデオで撮り続けている。

ナイジェリア，ラゴスのろう者の教会（2006年，著者撮影）

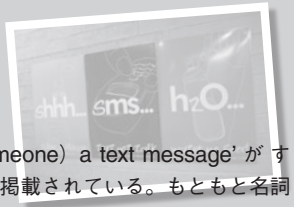
ナイジェリアには，ろう者の教官がろう教育専攻の学生たちに必修科目として手話を教える大学がある。このように，ろう教育で手話を使うことに否定的だった日本やヨーロッパとは異なる手話の歴史がアフリカにはあり，日本の私たちも学ぶことの多い大陸なのである。

本欄では3回にわたり，アフリカのろう者たちの視覚的なことばと文化の世界を探訪し，その魅力をご紹介したい。

表紙写真について

You Can Silent Text

田嶋 美砂子　Tajima Misako　（星美学園中学高等学校）



このポスターは，現在私が通うシドニー工科大学の図書館に掲示されているものである。左側からそれぞれ「私語の禁止」，「携帯電話での通話の禁止」，「水以外の飲食物の持ち込み禁止」を謳っている。中央のポスターにある‘sms’とは‘short message service’の略語である。つまり，図書館内では通話（talk）の代わりにショートメッセージ（text）を「静かに」送ることだけは許可されているというわけである。ちなみにこちらの携帯電話では，その名の通り160文字程度の短いメッセージしか送ることができない。そのため，“Thnx 4 ur msg.（Thanks for your message.）”のように，省略した綴り字が頻繁に使われる。

同じポスターの一番下には“On this floor you can silent text but you can’t talk on your phone.”と書かれてある。‘silent text’を一つのまとまった動詞として使用している点が興味深い。『オックスフォード新英英辞典』（2003年）には，動詞としての‘text’の用法である‘send（someone）a text message’がすでに掲載されている。もともと名詞であった‘email’が，現在では動詞としても大いに使われているのと同じ流れであろう。

‘Language in Social Context’という科目の講義で，「コンピュータの普及とともに名詞の動詞化が急速に進んだ」という話を聴いた。綴り字の省略や‘text’の新しい用法を考えると，コンピュータに加え，携帯電話もことばの変化に大きく関与しているといえるかもしれない。